

「寺」を基盤とした「暮らしの談話室」開設による 地域包括ケアシステムの具現化

堀 智子¹, 松本 七十子¹, 宮川 栄美子², 三浦 紀夫³

¹ 藍野大学医療保健学部看護学科, ² 一般財団法人安住荘, ³ NPO 法人ビハーラ 21

報告概要

昨年度より引き続き、今年度も「寺」というインフラを活用した地域包括ケアシステムの具現化を目指し活動を行った。結果、大阪府看護協会後援のもと、通常開催のあかんのんカフェを毎月 12 回開催し、さらに、安住荘で別日に行われている活動の横のつながり連携強化のためのイベントも実施できた。今後も安定的な経済基盤の上、「寺」を基盤とした活動の縦断的、横断的活動を実施していき、地域密着型の地域包括ケアシステム構築のために活動を継続することの重要性が見いだされた。

1. はじめに

令和 4 年度より我々は、藍野大学度地域支援プロジェクトより活動助成を頂き活動を行っている。昨年度、認知症カフェ&まちの保健室を計 13 回のイベントともに地域住民と藍野大学の学生も巻き込みながら活動を行ってきた。昨年度末から、大阪府看護協会の後援を得て、まちの保健室も併設することができ、地域住民の健康の維持向上を府民への市民貢献としての活動を始動し始めている。そこで、今年度はまちの保健室&認知症カフェを基盤としつつ、地域包括ケア実践の場として「寺」をどのように活用していくか模索していった。以下、その活動の成果を述べる。

2. プロジェクト目的

地域包括システムの拠点として「寺」を中心に、地域に住まう人々の共生の場づくりに参画し、地域包括ケアシステムの具現化を目指す。

3. 実施内容

2023 年度の活動については、昨年度に引き続いてあかんのんカフェ（認知症カフェ&まちの保健室）を中心に、あかんのんカフェが行われている安住荘で別日に開催されているイベントの横断的イベントを年度末に開催した。毎月開催されているあかんのんカフェのプログラムについては表 1 に示す。

あかんのんカフェについては毎月第 3 土曜日の

表 1 安住荘でのコミュニティナース活動

NO	日時	内容
1	4月15日	ハンドトリートメント
2	5月20日	ヨガセラピストによるセラピー体操
3	6月17日	口の中の健康を考えよう
4	7月15日	たたみの上のオリピック
5	8月19日	夏祭り
6	9月16日	地域の薬剤師さんに聞く高血圧について
7	10月21日	えんたくんDE話して！聴いて！元気になる会！
8	11月18日	あったかめぐるからだケア ~お灸と体操~
9	12月16日	音と語りのクリスマスパーティー
10	1月20日	笑いヨガ
11	2月17日	認知症について ~病院ドクターと話し合おう~

14 時から定期開催をしており、常連参加者 10 人をベースに新規参加者 1~2 名がおり、参加者数は漸増している。年度末には参加者の関心のある認知症をテーマにしたこともあり、大勢の参加者で会場が満席となった。

あかんのんカフェは常連参加者を中心に行っていることもあり、毎月開催イベントについては外部講師を招き、「ハンドトリートメント」「えんたくん」「お灸」「シンギングボールの音浴」などのワークショップ、また、医療の専門家による「高血圧」「認知症」「口腔ケア」などをテーマにした講話を行っており、毎回参加者から満足の声が上がっている。このような認知症カフェを併設して、同時にまちの保健室も開催しており、参加者全員に血圧、酸素飽和度、体重、体脂肪率などの計測を行い、参加者個々にフィードバックを行うと共に、個人カルテに保存し、参加の健康管理を行っている。参加者たちは計測時にそれぞれのデータを聞き、ここ最近の心身の振り返りを行っている。また、個別に看護師に相談があるような場合は、あかんのんカフェを主催している看護師が別日開催しているまちの保健室の相談会に来場し、個別相談を行い、地域住民の

あかんのんカフェが開催されている安住荘は「地域共生とグリーンケアの問法会館」を掲げており、地域に拓かれている。昨年は安住荘がオープンして 1 年目であり、定期開催の活動が少なかったが、今年度は図 1 のように、あかんのんカフェ以外にも「親なきあ



図 1 安住荘でのイベントプログラム

と相談会」「セラピー体操」

「表現と語りのワーク」「介護ナース」「がんサロン」などを定期開催しており、安住荘で、毎日何かのイベントが行われており、2 階部分の就労継続支援事業所と合せて、毎日人と情報の往来があり、まちのたまり場としての機能を果たしつつある。このように安住荘という場を中心として、毎日のようにイベントが開催されているが、イベントが日替わりが故にこれらのイベントを主催している主催者同士がつながる機会がなかった。暮らしの談話室、まちのたまり場として、拡充していくために、安住荘で行われるイベントの横のつながりを密にいき、それぞれの活動家が連携を取っていく必要性があると考えた。

そこで、年度末に安住荘を活動の場に行っている 3 つの団体を迎え、シンポジウムを行った。まずは「子ども」「子育て」というテーマを軸にして、「子ども食堂&放課後学習支援」「ママと赤ちゃんのための親子ヨガ」「子どもをなくした親のグリーフケア れいらにの森」という 3 つの団体の主催者を招き、最後にはお寺が地域にどのように拓かれていくかと視点で、上記の 3 団体の主催者と大阪府下でまちの保健室をお寺で開催している僧侶の 5 名でクロストークを行った。

このイベントはオンラインと対面参加というハイブリット方式で行い、参加者は計 10 名であった。子どもをめぐめるケアを安住荘で実践している各活動家から、それぞれの活動を始めるに至った経緯、日々の活動内容、これからの課題が報告された。それぞれの活動は活動家自身の子育て経験や子どもを亡くした喪失体験など、個人的な経験から地域での支え合いの必要性を感じ、立ち上げていった経緯が報告された。それぞれ 1 年以上の活動を経て、着実に地域住民のニーズをくみ取り、地域に根差しつつあることが報告された。各団体の課題の共通点として、広報活動と経済的基盤の安定化があげられた。このような点について、僧侶を交えたクロストークにて、お寺が持つ地域での歴史的、土着の基盤を



図 2 「安住荘×子どもケア」イベントチラシ



図 2 「安住荘×子どもケア」登壇者

活用していくこと、さらに、経済的基盤の安定化のために、法人化などの制度活用が話し合われた。

参加者の反応も良好で、地域のインフラとしての寺の活用を具体的に明確になったと述べた参加者もいた。一人の参加者からは以下のような感想を得た。「このような活動が行われていることを地域を管轄する行政や医療・福祉組織がどの程度把握されているのかが気になりました。このような素晴らしい活動を地域の人が行っているのであれば、その活動を本当に必要として



図 3 安住荘でのイベント時のクロストーク

いる人へ周知していくことも必要ではないかと思えます」と言った声や「昔へ遡ってみると、「お寺」は地域住民に身近な開かれた場であったと思います。江戸時代では、講や寄合などは、「お寺」で開かれていましたし、寺子屋なんて言葉も、「お寺」で読み書きを習っていたことが発端で生まれた言葉だと思えます。第 2 次世界大戦中は、疎開先としても「お寺」が選ばれていることが多かった気がします。人との結びつきが希薄になっている現在、再び「お寺」が地域住民にとって開かれた場となり、そこで活動をする人、活動に参加した人、みんなが心救われて日々の生活に帰っていく。本当に素晴らしい取り組みだと思えます」など、地域包括ケア実践の場として、地域包括ケア実践の場として「寺」の可能性を示唆する意見も聞かれた。

4. 結果・今後の展望

今年度は予定していた通常開催のあかんのんカフェを毎月 12 回開催できたことに加え、カフェの場である安住荘で別日に行われているイベントの横のつながり連携強化を図ることができ、我々が目指す地域包括ケアを具現化するまちのたまり場の基盤整備ができつつあると推察する。この度の横のつながり連携強化は「子ども」「子育て」を中心に行ったが、次年度は「高齢者」「障がい者・児」などの対象を焦点を当てて活動している団体でのクロストーク、また、様々なワークショップ開催が地域住民にもたらす効果についての検証を想定したクロストークなども実装可能と思われる。すでに地域包括ケアの具現化として、地域に開放しているお寺は多く、大阪府においては大阪府看護協会が管轄している 16 のうち半数がお寺が実践場ともなっており。それらは看仏連携として称され、お寺という物理的な場、あるいは場の持つスピリチュアリティと人々の健康を守る看護がタッ

グを組んで、施設を飛び出したケアを実践している^{1)~8)}。安住荘での市民への健康教育支援については、基盤が固まったということで、まちの保健室は今年度をもって大阪府看護協会の後援が終了することが決定している。年度末に実施したイベントでは各活動家より安定的な経済基盤が課題として挙げられたが、今後は経済的基盤を確保しつつ、地域の持つ特性、ニーズを把握しつつ、より地域住民により沿った独自の活動を展開していく必要がある。今後も、我々は安住荘のある地域を軸としつつ、地域住民の身体的心理的社会的健康保持のための活動を継続していく予定である。

参考文献

- [1] 井上 従昭, 河野 秀一, 高橋 弘枝: あらたな地域包括ケアのかたち「看仏連携」地域と多職種がつながる「場」をつくる お寺の役割と看護職との関わりとは, Nursing BUSINESS, 17 巻, 1 号, 04-11(2023)
- [2] 矢田 俊量: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 11 回) 寺院・僧侶が行うグリーンサポートと地域連携, Nursing BUSINESS, 16 巻 11 号, 1014-1017(2022)
- [3] 石原 政洋: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 12 回) お寺を「健康・長寿」を支える場に, Nursing BUSINESS, 16 巻, 12 号, 1112-1116(2022)
- [4] 井上 従昭: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 5 回) つながる・集う・育つ 地域包括ケアシステムにおける寺院の役割, Nursing BUSINESS, 16 巻, 5 号, 436-439(2022)
- [5] 大河内 大博: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 4 回) 看仏連携で共創する地域包括ケア拠点としてのお寺(解説) Nursing BUSINESS, 16 巻, 4 号, 336-339(2022)
- [6] 秋田 光彦, 齋藤 佳津子: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 3 回)お寺のコミュニティ・ケア, Nursing BUSINESS, 16 巻, 3 号, 244-247(2022)
- [7] 河野 秀一: あらたな地域包括ケアのかたち 教えて!看仏連携(第 1 回) 地域包括ケアシステムにおける寺院・僧侶との連携とは, Nursing BUSINESS, 16 巻, 1 号, 54-57(2022)
- [8] 高橋 弘枝: ACP・地域包括ケアにおける“看仏連携”の実際(第 4 回) 地域の寺院をまちの保健室に 看仏連携への期待, ナースマネジャー, 23 巻, 6 号, 47-51(2021)